

母親の「地域の学校で学ぶ」の手記を読んで
- とともに学ぶと、みんな大切な友だちになれる -

宮城県は、障害児教育将来構想で地域の学校での統合教育推進を掲げている。その推進の一環か、先日県北で、シンポジウムが開催されたよう(私はいにく別用で聴講できず)。

当日、6年間地域の小学校に通学し、この4月から地域の中学校に通うお子さんの母親(私のメル友)が、シンポジストとして話した「地域の学校で学ぶ - たくさんの支援が必要な子どもの暮らし - 」と題するレポート(2Pから掲載:参照)を郵送していただいた。

この6年間の経過がよく分かる実によくまとまっている文章であり、そのことを母親に伝えたと、次のように返信をくださった。

「私は、同級生が親切に接してしてくれるのは、障害があるからではない。6年間一緒に過ごした大切な友達だから、助け合う対等な『お互い様』の関係を築けた。差別的な立場から解放されたように感じた。

重い障害がある子ではなく、たくさんの支援が必要な子であると、親は思うようになった! 障害が重い分だけマイナスされた人権が、支援を受ける権利がプラスされた人権であると思うようになった。

『ととともに学ぶと、みんな大切な友だちになれる。』と話しました。」

今は、障害児が地域の学校に通うケースも増えてきているが、この親子が6年前から、しかも重度の障害があり、また医療的ケアを必要とするお子さんだけに、どれ程教育界の無理解な壁が厚かったかを知るだけに、この親子には「よく頑張ったね。」とだけでの気休めな声はかけられないし、無理解だった社会の一員として謝りたい気さえする。

医療的ケアを必要とする子どもたちは、地域の学校への入学を拒否されたり、養護学校でも医療的ケアについては、どこか当事者抜きの論争が未だ続いている。

「障害があるからではない。6年間一緒に過ごした大切な友達だから、助け合う対等な『お互い様』の関係を築けた。」と語るこの親子に、教育界関係者は何と声をかけるのであろうか。

それでもなお、教育環境改革への努力を差し置いて、「障害児は、養護学校へ」と勧めるのであろうか。一人一人に尋ねたいものである。

“Children with disabilities are children, first.” を、決して忘れないで欲しい!

(2005年7月3日)

中村 和 恵

1 中村 萌の紹介

娘の萌は、笑顔も怒った表情もとてもかわいい我が家の大切なひとり娘です。歩くことも、寝返りも、話すこともできない重い障害があり、医療的ケア(経管栄養)が必要な子どもです。

今年の春、石越町立石越小学校を卒業して、登米市立石越中学校に入学しました。セーラー服を着て瞳を輝かせて通学しています。

2 萌にとっての幸せは？

①早期療育を求めて

障害がある子どもは、早期からの療育によって、障害の軽減や克服をすることが大切なことと思っていました。

しかし、当時住んでいた岩手県花泉町では、通園事業もなく、一関市で週2回開かれていた療育教室に通うのでさえ、何度も町役場の福祉課に話をし、何ヶ月もかかりました。幼稚園入園の勧誘のお便りが萌にだけ来なかった時には、障害を告知された時よりも泣きました。

娘が通える場所を作るために親の会の活動に奔走したり、通園施設の受け入れ条件に合うように訓練に励みました。

萌を連れて、一関市長に交渉に行った時に、「昔はこういう子どもは隠しておいたものだが、連れてきて偉いですね。」と言われました。本当に悲しくて悔しい思いをしました。

②養護学校

一関養護学校は病弱児養護学校、前沢養護学校は、知的障害児養護学校です。重複障害の子どもは、どちらにも通学できず、訪問教育(小学部、中学部)と決まっていました。

宮城県では、平成9年度から要医療行為児童生徒支援事業がおこなわれ、医療的ケアの必要な子どもが養護学校の高等部まで親の付き添い

無しに通学できるようになることをびゅあすまいる(経管栄養の親の会)の活動で知りました。

③障害児者だけに広がる世界

平成8年の冬、宮城県の通園施設と養護学校に通学できるようにと石越町に転居しました。

萌が、送迎バスに乗って、登米広域通園施設こじか園に通園できるようになった時は本当に嬉しかったです。生活にもリズムができ、とても充実していると思っていました。

岩手県南の障害児の親子との交流も続いていて、新たに登米郡内の親子との交流も広がりました。障害児者のためのクリスマス会は、親の会や福祉団体など8ヶ所から招待状がきました。休日にも障害児者の催し物がいっぱい、生活の場が広がるのは障害児者だけの場所です。社会との隔たりが大きくなってゆくと感じました。

④本人の幸せは？

通園施設の研修で、「どんな子どもになってほしいか。」をまず考えることを教えられた時、それまで萌の成長を期待していなかったわけではないのに、その言葉にショックを受けました。

重い障害を持った子どもの暮らしは限られていて、社会の中でどう生きるかを自由に選択できるとは思えなかったからです。

これから先の萌の暮らしを想像しました。通園施設、養護学校、障害者の施設への通所…。一生障害児者の中で過ごすことになるのかもしれない…。本人の望んでいる幸せな暮らしではないと思いました。

子どもとして当たり前の幸せを得て、生きていることが楽しいと思える毎日を過ごしてほしい。重い障害があるからと言い訳をして、本人にとっての幸せをあきらめるのはやめにしようと思いました。

6歳の萌にとっての幸せは、たくさんの子ど

も達と一緒に過ごし、声を聞いたり、話しかけられたり、いっしょに笑ったりすることです。石越小学校に入学させようと決めました。

⑤地域格差

花泉町は夏川を境に宮城県石越町と接しています。川の向こう岸は別の世界が広がっています。県境に住んでいたために、障害の重さによる振り分け以前に、地域格差がある現実を体験しました。障害の程度による振り分けの基準が、絶対ではない。障害の程度が問題なのではなく、受け入れ側の準備の都合でしかないと思いました。重い障害があっても、それに対する取り組みがなされれば良いのだと思いました。

3 就学 (詳しい内容は省略)

繭よりもはるかに軽度で、肢体不自由児学級を希望する同級生のお子さんは、入学できます。

しかし、担任ひとりで、介助が必要な2人の子どもの指導はできないし、町で介助員をつける事もできないと言われましたが、諦めずに、教育委員会と何度も話し合いをしました。

「居ごちのよいところを求めてそこへ入っていこうなどと思っていたら、いつまでたっても迷いから脱けられません。居ごちが悪ければ居ごちの良くなるように、その場を変えていくしかありません。」徳田茂著『地域に生き共に育つ』より。この言葉を念じながら、繭の居場所を作っていこうと考えていました。

4 ともに学ぶとどうなる？

石越町立石越小学校

平成11年度、障害児教育の充実促進モデル事業に指定されて、加配の先生がつけました。

2年間のモデル事業終了後は、養護学校の先生が石越小学校に出張して繭を指導しました。

肢体不自由児学級在籍ですが、交流学級にも席があり、授業も一緒に受けました。

☆なかよし係通信

1年1組の学級会でクラスの係を決める話

し合いで、繭ちゃんは何の係がいいかとみんなと真剣に議論しました。図書係を提案した子がいましたが、繭ちゃんは本が運べない。それでは、けんか止め係がいいと言った子に、先生がもっといい言葉はないかなと言ったところ、なかよし係に決まりました。

重度障害児が生きてゆくには、たくさんの人の支援が必要ですから、より大きな人の和をつくってゆきます。それを見事に言い表わすような子どもたちの豊かな感性に感心しました。

学校の様子や繭の成長などを学期毎に「なかよし係通信」として公表してきました。

子ども達が障害のある子にさりげなくできる当然のことで、大人にとっては、素晴らしい感動的な出来事と映ってしまいます。

☆ありのままがいい

元気な子どもが1日で治るような風邪でも、繭が回復するには1週間位かかります。体調の管理はととも気を使いました。

元気な子どもたちの中にいると、繭の小さな成長は見えにくく、養護学校で障害に合った適切な教育を勧められます。成長が見えても、養護学校ならもっと成長できるのと言われてしまいます。

繭には繭の成長のスピードと学ぶスタイルがあります。繭がありのままにここにいること、みんなといっしょに、ここで成長してゆくことが大事なことです。

☆繭の成長

繭は、子供達の中で過ごすことにより、周囲に対する関心や興味が高まり、とても意欲的になりました。「感情表現が豊かになるなど大きく成長した。」(石越小校長)とされています。

今まで繭のことを知らなかった近所の人達も、学校の行事や子ども会の活動で繭の姿を見ている。成長をいっしょに喜んでくれる人がいることをとても心強く思います。

☆訓練

拓桃療育センターでの訓練の他に、自宅で月に2回、訪問看護ステーションの理学療法士による訪問リハビリを受けています。

身体的な面だけでなくコミュニケーションの能力を高めることを目標としてやってきました。質問には、指や目で意思表示をして答えられるようになりました。

☆修学旅行の自主研修

先生は、行動計画が決まってから蒔さんが行動しやすいような計画を立てたグループに参加しようと考えていました。ところが、「まゆちゃん、こっちこっち」と呼ばれて参加するグループが決まりました。

蒔がいるグループの子ども達は、移動時間の多い日程を組みました。蒔ちゃんのためにそうしてあげたとは誰も言わないのです。

子ども達は、障害がある子だからやさしくしてあげるのではなく、たいせつな友達だから、必要な時に必要なことをして助け合うのです。

学校行事の時は、荷物が多く、身支度に時間がかかり、車椅子での移動も大変でした。子ども達は、蒔の日常を良く見て知っていたからできることです。

当たり前とは、ハンディをハンディと感じずにいられることなのだと思います。

障害のない子と障害のある子は、「してあげる」「してもらおう」関係ではなく、支え合い助け合う対等なお互いさまの関係です。

先生が、障害のある子にどう接するかによって、また、障害の無い子どもたちへの言葉のかけ方によって、関係がつくられてゆきます。

ともに学ぶことはどうなる？

障害のある子どもと障害のない子どもは、「思いやり」をもって「当たり前」に支え合い助け合う「お互いさま」の関係。

答え みんな大切な友達になる。

登米市立石越中学校

①モデル事業の指定

蒔は、普通学級の1年1組に在籍し、主に学習支援室で学習しています。教員の加配、医療的ケアの看護師がつけました。設備改修も予定されています。

②中学校の取り組み

入学に際しては、迫養護学校の特別支援コーディネーターの先生と石越小学校で担当した先生から、石越中学校の学習支援教室の担任、学年主任(特別支援教育コーディネーター担当)、知的障害児学級担任、肢体不自由児学級担任、養護教諭に対して、小学校での教育発育状況などについての説明がなされました。

学年主任の先生は、県のコーディネーター要請講座を受講、担任の先生も研修を受けています。校内でも先生方の研修が行われています。

中学校の教師の体制は、学年毎に先生がまとまり、課題に取り組んでいます。

P T A総会では、先生から障害児教育将来構想と石越中学校でのモデル事業について、保護者への説明がありました。

入学するまではとても不安でしたが、ひとつひとつ取り組む事で不安は解消されました。

③課題

☆施設設備の問題

蒔は、知的障害児学級(3名)や肢体不自由児学級(1名)と合同の授業が大好きです。1組のみなどいっしょにいることも強く望んでいます。

蒔のいる学習支援室は1階です。1組の教室は2階にあり、交流できる時間は行事などに限られてしまいます。自由に移動するためには、エレベーターは必要です。

☆学習内容

蒔の成長は、重い障害のある子どもだけの集団での指導の内容や方法とは異なると感じています。意欲的に学ぶことのできる学習内容や指導等が研究されることを期待しています。

④ 繭の成長

中学生になって、益々意欲的な表情をするようになりました。気持ちはみんなと同じ中学生になっています。

健康観察では、体調が良くなくても疲れていても、親指を立てて「元気です。」人差し指を立てて「がんばります。」という気持ちをあらわします。

1年1組の教室に貼っている自己紹介です。

自己紹介	1年1組 25番	中村繭
誕生日	平成4年7月22日	
星座	かに座	血液型 B型
好きな教科	国語 英語	
努力する教科	自立活動	
部活動	総合文化部	
委員会	生活委員会	
好きな食べ物	プリン	
自分を動物にたとえると	ひつじ	

好きな食べ物や動物にたとえるとという項目は、繭が視線で答えを選ぶ方法で答えました。

☆言語訓練

拓桃療育センターで、担任の先生とサウンズアンドシンボル(絵文字)の言語訓練を学びました。家庭でも学校でも取り組んでいます。

はじめに尋ねてみたのは、「セーラー服は、好き、嫌い？」です。繭が目で指し示したシンボルと表情から、「大嫌い！！」という答えがわかりました。このような方法で意思を伝えられるようになったことは、大きな喜びです。

⑤ 中学校に期待すること

先日は、2泊3日の志津川での合宿に参加しました。子どもたちとの差も大きくなってゆく中で、意欲を損なわずに達成感のある学校生活になることを願っています。様々な体験をして、いろいろな気持ちを言葉にして伝えてくれるようになることを楽しみにしています。

5 今、思うこと

☆障害がある人の人権

繭の教育を求め始めた2歳の時は、病院以外通うところが無い悲しさ。それから、通園施設や養護学校がある喜び。障害児者の社会参加への流れのなかで、地域の学校へ通学する現在。

10年間で重度重複障害児の在宅生活の何十年かの歴史をたどるような体験をしてきました。「障害がある」というマイナスの条件付きの人権が、「支援を得ることができる」という条件がプラスされた人権に思えるようになりました。差別的な立場から開放されるように感じました。

繭は、「重度重複障害がある子ども」ですが、今までの体験を通して、「たくさんの支援が必要な子ども」であると思うようになりました。

障害による困難は、支援があるかどうかで軽減されたり当たり前暮らしができるようになると思いました。

☆当事者と専門家

当事者ひとりひとりが、みんな、「私の幸せは、私が選ぶ。」と自分の望む暮らし方を主張し、必要な支援を当然の権利として得ることによって、暮らしやすい社会になってゆくと 생각합니다。

教育、医療、福祉の専門家は、当事者の思いを受けとめて、連携して、支援を考えてほしいと思います。

子どもが受ける教育を選ぶことができる。

どれを選んだとしても、発達保障がされる。

選べるように教育環境がととのえられる。

理想の統合教育探る 障害児保護者ら意見交換 古川

障害のある子どもが、地域の学校で学ぶ統合教育について考えるシンポジウム「地域の学校でともに学ぶことはどうなる？」が25日、宮城県古川市のパレットおおさきであった。県教委が推進する統合教育のモデル事業の課題などについて、障害児の保護者や教育関係者らが意見を交わした。

NPOや古川養護学校父母教師会で作る実行委員会の主催。重い障害のある長女が登米市石越中に通う中村和恵さん、NPO法人「共育を考える会」事務局長の飯嶋茂さんら5人が、パネル討論した。

中村さんは、医療的ケアや車イスが必要な長女の繭さんが地元の石越小を卒業し、4月に石越中に入学した経緯を紹介。「同級生も親切に接してくれる。中学に入り、友人らとコミュニケーションしたい気持ちが強くなった」と語った。

繭さんが授業を受ける学習支援室は校舎1階にあり、在籍先の普通学級は2階にあるため、「移動が大変で、同級生と交流する時間が少ない。エレベーターが必要」と課題も指摘した。

飯嶋さんは「補助教員や介助員がいないと統合教育は無理という声もあるが、学校全体で障害児を受け止める気持ちや体制があれば、施設や人員面の課題はカバーできるはずだ」と述べた。

2005年06月26日日曜日
